

# 令和8年度 鈴鹿市立鈴峰中学校「学校経営の改革方針」

## 1 めざす学校像（基本理念）

「豊かな人間性とたくましい実践力を持つ生徒の育成」

校訓 「明るく 美しく 楽しく」

【鈴峰中学校区統一キャッチコピー】

「地域とともにたくましくチャレンジする鈴峰の子」

## 2 めざす生徒像

- (1) 確かな学力を積み上げ、主体的に学ぶ生徒
- (2) 心やさしく自他を大切に思いやりのある生徒
- (3) 地域を愛し、情操豊かで明るい生徒
- (4) 社会性を身につけ、進路を主体的に切り拓く生徒
- (5) 健康で粘り強い生徒

## 3 現状と課題

### (1) 学力保障・学力向上について

#### 【学力向上】

素直で自制心のある一方、受け身で粘り強く取り組む力が弱い生徒が多い。R7年度第2回みえスタ2学年の結果は県平均と比較すると国語-0.2%、数学-1.5%であり、記述における無回答も県と比較で国語+1.0%、数学+3.5%と高く、データからも後半の問題の無回答率が上がっており粘り強さが弱いことを示している。

#### 【授業改善】

研究主題を「自ら学ぶことのできる生徒の育成」～探究のプロセスと教科の見方・考え方を通して～と設定した。生徒が主体性を発揮したり高めたりできるよう生徒自身が学習方法を選択したり課題設定したりする場面を設けるための指導の工夫に力を入れている。また、中学校区で連携して先進地視察および還流を積極的に行い、各校の授業改善につなげている。さらに、生徒承認活動を軸とした実践にも継続的に取り組んでいる。

### (2) きめ細かな対応と不登校対策について

特別支援学級（知的及び自・情）と通常学級在籍の特別な支援を必要とする生徒について、十分に情報共有とアセスメントのうえ、個々に対応する必要がある。不登校生徒については、昨年度、欠席30日以上の子は16人（うち不登校6人）であった。〔令和6年度 欠席30日以上した生徒は14人（うち不登校8人）〕

これまでも、児童生徒理解支援シートを活用した継続した支援を行うとともに、SC や関係機関等と連携した校区不登校担当者会を開催してきたが、個々の学びを保証するためにもさらなる充実が必要となる。

### (3) 人権教育の充実について

生徒の様子に見られる学習の進捗及び達成度に問題はない状況であると思われるが、個別の事象については実体験が豊富であるとは言えない。特別支援教育の

必要性について、地域・保護者（特に祖父母）の理解が得にくいと感じている保護者の意見もあり、人権教育の充実は地域全体の課題でもあると考えられる。

#### （４）校区及び地域連携と協働について

校区小中学校共に小規模校であり、連携の必要性と連携によって得られる効果は高い。また、保護者や地域は学校支援に関して非常に協力的で、年２回の廃品回収や学校環境整備の取組を大規模に行っている。数年前に登校中に大きな交通事故が発生したことも踏まえ、交通安全指導の視点からも一層の連携・協働の強化を図りたい。

#### （５）信頼される学校と働きやすい職場づくりについて

不祥事及び不適切な指導の根絶に向けて昨年度も取り組み、R7年度は職員の交通事故０も達成している。引き続き、注意喚起と職員研修を推進し、未然及び再発の防止に努める。ただ、昨年度の時間外労働時間については、月 80 時間超のべ 2 人、同 45 時間超のべ 34 人、年 360 時間超が 6 名と多い。よって、教職員の健康管理の観点からも時間外労働縮減について、職員自らが自分事として捉えることができるよう働きかけや研修が必要である。

## 4 重点目標

- （１）主体的な学びの創造を推進し、学力向上をめざす。
- （２）生徒の特性を理解し、きめ細かな指導と支援を行う。
- （３）不登校・長期欠席生徒の状況改善を図る。
- （４）人権教育を推進する。
- （５）生徒指導・交通安全指導の充実を図る。
- （６）校区連携、地域との連携・協働を推進し、安心安全な学校をつくる。
- （７）職員の時間外労働時間削減等の働き方改革を推進する。
- （８）服務規律を遵守し、生徒や保護者、地域から信頼される職員を育成する。

## 5 本年度の具体的行動計画

### （１）学力保障・学力向上

- 鈴教研委託事業として研究発表会を実施する。この発表会を通して、これまでの本校の取組の成果を発表し、鈴鹿市全体の教育力の発展に寄与するとともに、さらなる授業力向上につなげる。
- 全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果を分析し、生徒の実態把握をもとにした授業改善に取り組む。
- 生徒の主体的な学びを育てるため、Chromebook をはじめとする ICT 機器の授業における効果的な活用方法及び指導方法について研究を推進する。
- ３年間を見通したキャリア教育を進める。情報提供と丁寧な教育相談を心がけ、主体的な進路選択につながる進路指導を行う。
- 家庭学習の習慣化に取り組むため、鈴峰中学校「家庭学習の手引き」を配付するとともに、各学期に 1 回「家庭学習週間」を実施し、家庭と連携して家庭学習の習慣化に取り組む。

- 「朝の読書」「朝の学習」「帰りの学習」「自主学習タイム」「サマースクール」を実施する。また、朝の15分間の短学活で、1・2年生は「朝の読書」「朝の学習」に、3年生は「朝の学習」に取り組む。3年生は帰りの学活で「帰りの学習」を行う。また、定期テスト前に2日間自主学習タイムを設ける。夏季休業中には、サマースクールを全学年で実施する。更に、校区の小学校と連携して、定期テスト前に家庭学習強化週間を設定し、学習時間の確保を図る。

## (2) きめ細かな対応と不登校対策

支援の必要な生徒の情報共有に努め、特別支援学校・医療・行政等関係機関との連携を進め、教職員の対応力向上を図る。保護者には、医療受診への同席を提案し特性情報の更新を心がけ、個々に合った支援を実践する。

また、長期欠席生徒と保護者に寄り添う姿勢を基本とし、職員全体で傾聴・訪問等のスキルを共有する。外部関係機関との連携が必要な生徒が多いことから、同行受診やコンサルテーションの機会を積極的に持てるよう働きかけ、より効果的な対応を実践する。

## (3) 生徒指導・交通安全指導の充実

生徒指導については、組織的な対応を行うための報告・連絡・相談の仕方について共通理解を図る。このことについては、年度初めの生徒指導研修会にて、全職員で確認する。

また、交通安全指導については、交通安全担当を中心に、「交通安全教室」「地区別生徒会」の取組を通して、生徒及び保護者への啓発と地域連携を充実させることで、生徒の交通事故ゼロを目指す。

## (4) 小中一貫教育を見据えた小中連携の推進

日頃から、中学校区の連絡・相談を密にするとともに、校区校長会を年間9回以上開催する。さらに、令和7年度から始めた拡大校区校長会を開催し、広域的な情報共有と統一取組の拡大をめざす。

また、中学校区拡大大学校運営協議会を年間1回開催し、共通課題の洗い出しと対策等を進める。登下校の安全確保、学校環境整備を具体的な取組として協働を推進する。

今後、鈴峰中学校区の小中一貫教育を見据え、合同研修会（授業改善等）や校区の担当者会、あいさつ運動、家庭学習強化週間、児童生徒の交流活動など、様々な教育活動を通じて、小中連携及び小小連携を推進する。

## (5) 働きやすい職場づくり

教職員間の対話を重視し、組織としての意思疎通を行い連帯感の向上を図る。定時退校日の設定や各種会議の精選・短縮化、年休等の取得を促進し、働き方改革に努め時間外労働時間の削減を図る。また、鈴鹿市運動部活動の指針に基づいて活動を行うとともに、保護者にも指針を周知し、理解と協力を求める。

### 進捗管理指標

#### ○上限時間に基づく目標

- ・ 1人当たりの月平均の時間外労働 30時間以下
- ・ 年360時間を超える時間外労働者数 0人
- ・ 月45時間を超える時間外労働者の延べ人数 0人

### ○休暇取得促進の目標

- ・平均休暇取得日数 23日以上 (R7 : 20.1日、R6 : 20.0日)

### ○その他重点取り組み目標

- ・定時退校日の設定 月2回  
設定した日に定時退校できた職員の割合 100%  
(R7 : 95.5%)

※設定した日に退校できない場合は同月内に個別に定時退校を実施する。

- ・部活動休養日を計画通り実施した割合 100%  
(R7 : 100%)
- ・放課後の会議の時間短縮 60分以内に終了した会議の割合 100%  
(R7 : 94.4%)

### (6) 服務規律に関する研修の実施

県や市からの通知等をもとに、コンプライアンスの遵守、セクハラ、体罰防止等の研修を月に1回程度実施する。

さらに、適切な情報の取り扱いに関わる研修を、管理職・情報担当者・学年主任等それぞれの視点から重点的に行う。

### (7) 非認知能力の育成

- 生徒承認活動を充実させ、非認知能力の育成につなげる。生徒の個人目標を把握し具体的な事実をもとに生徒一人ひとりの努力を認めて評価し、フィードバックする他、Chromebook を活用し「いいところみつけ」の活動を進め、生徒の自己肯定感の向上を図る。
- 「陽口 (ひなたぐち)」の活動を教員間で積極的に行い、生徒の素晴らしい行動の情報共有を行うとともに、教職員と生徒の肯定的な関係性を構築する。
- 鈴鹿市版非認知能力アンケートにおける4つの要素 (①やりぬく力、②自制心、③自己肯定感、④社会性) のそれぞれ否定的な回答をする生徒の割合が①②③は10%未満、④は1.8%未満をめざす。